和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要第 2 巻 2021 年 3 月.152-173.

オンライン授業実践報告とポスト・コロナの教育改革についての考察

Online Teaching and Some Remarks on Education Reforms after COVID-19

梅田礼子

Reiko UMEDA

（和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門）

Abstract

This paper presents an overview of the online English classes which the author conducted in the 2020 academic year. It shows advantages and disadvantages of online teaching/learning and presents the possibility of shaping better and more efficient education by using online teaching system.

キーワード/Keywords:オンライン授業/学習、Moodle, Zoom, ポスト・コロナの教育、教育改革 Online Teaching/Learning, Moodle, Zoom, Education after COVID-19, Education Reforms

１．はじめに

2020 年度は新型コロナウィルスに世界中が翻弄された。我々の生活や教育の在り方が変更を余儀なくされた。

2 月には筆者が住んでいた名古屋市でもスポーツジムから集団感染が起きるなど、国内での感染・発症例が増え始めた。2 月 27 日、政府の「休校要請」（3 月 2 日から全国すべての小中学校、高等学校、特別支援学校の休校要請）を受け、大学も含め多くの学校が授業休止だけでなく、卒業式・入学式・入学オリエンテーション等の規模を縮小したり中止したりした。3 月 24 日文部科学省による「令和 2 年度における大学等の授業の開始等について（通知）」、4 月 7 日政府による「緊急事態宣言」（7 都県対象。4 月 16 日には対象を全都道府県に拡大。5 月 24 日全面解除）を受け、多くの学校が前期開講を遅らせたり、オンラインをメインとした授業へ切り替えたりといった、急対応を迫られた。

本稿を執筆している 2021 年 3 月には、国内でのウィルスの広がりが本格化してから 1 年が経過し、コロナ禍が教育に与えた影響について、調査報告や実態報告、論考なども複数出てきている状況である。今後なるべく早くコロナ禍が終息することを願うが、今回のコロナ禍

が大学教育現場に与えた影響の一例として、筆者が担当した授業について記しておくことは意味があると考え、報告する次第である。

また、オンライン授業の経験を機に、今後の教育改革についても考察する。

２．授業実践状況

２－１．和歌山大学の状況

和歌山大学では緊急事態宣言発出を受け、4 月 7 日に、「前期開講を 5 月 7 日(木)とし（4 月 22 日より再延長)、前期の授業期間を 16 週間から 14 週間、第 1、第 2 クォーターの授業期間を 8 週間から 7 週間にそれぞれ短縮する」こと、「授業実施方法の特別措置として、授業科目については、原則として遠隔授業（e-Learning）等に変更し、通常の対面での授業は極力避ける」こと、開講が遅れた分の授業補償として、授業時間を「1 回 90 分から 105 分とする」こと、が理事から通達された。

5 月 1 日には「５月３１日（日）までの期間は登学禁止とし、それ以降の期間の措置については改めてお知らせします」(併せて課外活動禁止も同日程）という通知がなされた。学生が居ないキャンパス、が決定した。

コロナ禍前から、大学教育において IT 利用、アクティブ・ラーニング、反転授業により学習時間を確立して授業では討論などより深い内容をする必要性、などが言われており、入学時にノートパソコンの購入を義務付ける学校も多くなってきていた。幸い、和歌山大学でも 2020 年度からそのようにしていたので、授業オンライン化の第一ハードルである、学生側の機器の問題はクリアできていた。また、オンライン授業プラットフォームとして Moodle も導入していたことは幸いであった。

２－２．開講前の準備

「原則としてオンラインで授業を行う」と大学が決め、教員はまず、シラバスの修正と授業をオンライン化する準備に追われた。

シラバスの修正点は、授業回数の変更による「授業計画欄」の修正、オンラインで通常と同じ単位認定試験が行いにくくなるため「成績評価方法」の修正、課題内容の再検討、などであった。

そして、授業をオンライン化するために、パワーポイント資料等の作成が必要だったが、筆者は 2020 年度より和歌山大学に勤務したため、全てが新科目・新テキストであった。授業用パワーポイント等のストックもなく、教材研究もすべてゼロからの出発であり、それらのストックがある教員よりも作業量は多かったと思われる。

オンライン授業をするのに必要な機器については、2018-2019 年に筆者自身が通信教育を受けていたため、すでにウエブカメラは所有しており、そのためのさらなる出費、使い方の学習は不要であった。

２－３．　授業実施方法

筆者が 2020 年度担当した科目は本務校和歌山大学で前期英語総合科目３（１年生２つ，２年生１つ)、TOEIC 対策授業１つ、後期は英語総合科目２（１年生１つ，２年生１つ)、TOEIC 対策授業１つ、および、非常勤で三重大学教育学部の音声学１つ、であった。

前・後期とも、和歌山大学の授業では、Moodle に Power Point ファイル（以下 PPT）を掲載するオンデマンド型とした。PPT には極力、音声・ビデオで解説を入れた。筆者自身が通信教育を受けた経験から、通信学習での孤独感・不安を知っていたためである。また、授業の前半最後や終わりのスライドには“Good job!”など誉め言葉や、キャンパス公認ねこの写真に「なんや疲れた～」など、ほっとするセリフを書き込み、学生がリラックスして受けられるように配慮した。（「なごむ」という感想があった。）1 年生の授業では、キャンパスの風景写真も用いて、少しでも大学に親近感を持ってもらえるよう工夫した。

テレビ会議システム Zoom または Teams を用いて同時双方向型授業とする選択肢もあったが、Moodle の使用法学習や教材研究から行わねばならない状況で、さらに新たにシステムの使い方を学習する時間はない、と判断したため、その選択はしないこととした。

総合科目について、対面授業であれば、学期末にプレゼンテーションを行ってもらう予定だった。それを、結局前期は英作文課題に変更、後期は Moodle 上に載せて発表という形とした。

筆者に時間的・精神的余裕があれば、Zoom または Teams を用いた同時双方向型授業にし、授業内に英語で発表・ピアレビューをしてもらえば良かったのだが、その余裕がとてもなかった。まずはどちらのシステムが良いかを WEB 上の情報や、近辺で使っている先生の口コミを比較したが、どちらも一長一短ありそうで、検討自体にも時間がかかった。Zoom の方が使いやすそうだが、大学では Teams は契約しているが、Zoom の契約はしていないとのことで、本学のいろいろな授業で数多くの学生が同時間にアクセスした場合の動作保証はないようであった。万が一同時双方向型授業をしている際にトラブルがあったときに対応できる力が無いまま見切り発車で行う勇気はなかった。また、教材研究・Moodle の使い方学習があり、結局使い方を学習して習熟する時間が取れなかった。

Moodle 上で音声付 PPT をアップするという形での「発表」と、「フォーラム機能」を用いて、プレゼンにコメントを投稿してもらう「ピアレビュー」ができそうだとは分かったが、これもしっかり学習する時間が取れず、前期は諦めた。小テスト機能で一度集めた経験があった、同じく「英作文」課題を提出、とした。成績評価に関わることであり、万が一うまく行かなかった場合、を懸念したためである。

後期は、夏季休業中にフォーラム機能の使い方を学習し、自分でファイルを投稿してコメントを付けて確認し、使えそうだと確認したうえで、PPT をアップするという形での「発表」と、「フォーラム機能」を用いて、プレゼンにコメントを投稿してもらう「ピアレビュー」とした。前期は学生同士の交流を図る機会がほとんどなかったという反省、特にまだキャンパスに通えず、友人作りも出来ていない 1 年生に少しでも交流の機会を与えたいと考え、その形態とした。

後期三重大学非常勤「音声学」の授業は Zoom で行った。三重大学では Zoom の有料契約をしていて、無料版のように容量の心配や、40 分で一度切れる、という心配がないとのことであった。すでに、前期に Zoom 利用で同時双方向型授業を行った非常勤担当の先生も「意外に簡単に使えるようになった。通常の授業に近い感覚で話ができる、音声学だから解説もこれを使えばやり易いと思う」と勧めて下さり、予行演習を行って基本的な使い方を教えて下

さった。

また、三重大学では新型ウィルス蔓延以前より Moodle を導入されていた。使用率は 2020 年度ほどではなかったにしても、一部利用されていて、Moodle 上に丁寧な使用法説明や、質問を受け付けるコーナーも設置してあった。

前期に筆者は Moodle の使い方を和歌山大学が載せている、基本的な使用法説明や WEB 上に出ていた情報を利用して、ほぼ独習した。緊急事態だったので仕方なかったもしれないが、例えば三重大のように、使用法を把握しているところがあったので、大学間で情報交換がもっとあれば、独習時間が減らせたのに、と思う。

２－４．成績評価方法

筆者担当の授業の成績評価方法の概要は以下の通りである。

表１．成績評価方法

	前期			
曜日時限	木２	金２	金３	金４
科目名	英語Ⅲ（資格試験対策）	英語Ｉ（総合）	英語Ｂ３（総合）	英語Ｉ（総合）
テキスト	Score Booster TOEIC	Am Eng File	Stretch!	BBC World！
人数、学部	35 名　システム工学　2 年	35 名　システム工学　1 年	27 名　教育 2 年	28 名　教育 2 年
成績評価方法	単位認定試験 40 ％，前回授業の復習小テスト 5 点×12 回計 60 点、60％	その回の復習小テスト 5 点×12 回 60 点（60%）、英作文 5 点×3 回 15 点、計 75 点、~~プレゼン~~提出　→英作文 20 点（20%）、~~ピアレビュー（またはコメント）~~　→感想に５点（5%）	~~プレゼン~~作成→英作文に 15 点+コメント 5 点、授業ごとの復習小テスト 5 点×12 回 60 点、英作文 10 点×2 回　20 点	毎回復習小テスト 5 点×12 回＝60 点 60%、~~プレゼンテーション作成または~~英作文 1 回 10%という平常点計 70%に加えて、単位認定試験 30%
	後期			
	木２	金２	金１	月３
	英語Ⅳ	英語Ⅱ	英語Ｈ４	三重大　音声学演習
テキスト	Full Gear TOEIC	Am Eng File	Stretch!	英語音声学入門．大修館
	35 名　シス工 2 年	35 名　シス工 1 年	27 名　教育 2 年少し 4 年	17 名　1 年　教育

成績評価方法	単位認定試験 40%, 前回授業の復習小テスト 5 点×12 回計 60 点、60%	復習小テスト 5 点×10 回 ＝ 50 点（50%）、 英作文課題 20 点 1 回＝20 点（20%）、 プレゼン作成 25 点 1 回 ＝ 25 点（25%） ピアレビュー5 点（５%）	毎回復習小テスト 5×10 回 50%） 英作文 1 回 20%） プレゼンテーション作成 1 回 25 点（25%）、ピアレビュー5 点（5%）	小テスト・ミニ実技テスト 40%（4 点・6 点計 10 点×4 回）、期末試験 60%

Score Booster for the TOEIC　L&R test Pre-Intermediate. 金星堂

American English File2（2nd Edition）. Oxford University Press.

Stretch2　Student Book.　Oxford University Press.

BBC World Profile on DVD　（BBC やさしい英語と映像で学ぶ総合英語）.南雲堂

Full Gear for the TOEIC L&R test　　金星堂

オンライン授業となるため、試験・小テストともに辞書・ノート等参照物の利用を可とした。（利用の有無をチェックできず、公平にならないため。）

また、木２TOEIC 対策授業では、ウィルス禍前の予定は「単位認定試験（参照物持ち込み不可）70 %、ユニットごとの復習小テスト（語彙、リスニング、文法、読解等）４点×15 回合計点を 2 で割り 30%」であったが、試験がオンライン（リアルタイム）で、カンニング等の恐れもあり、配分が高いことが憚られたので、成績評価方法における試験の配分を 40%と低くした。

２－５．授業のコンテンツ

筆者は 2018 年度・2019 年度に大手前学院大学で日本語教育教員資格取得のため通信教育を受けた経験があった。オンデマンドビデオ教材視聴、オンライン同時双方向授業、スクーリング（週末数回のキャンパスでの対面授業）、週末 2 回、合計 5 日にわたる教育実習、というミックスした形態だった。授業視聴・レポートが大変であることは経験していた。また、通信授業の孤独感も味わい、同時双方向授業で初めて、同じ受講生や先生と繋がっている感を体験し、嬉しくて顔出しで発言したり、後の教育通信システムでのディスカッションにも積極的に意見・コメントを書き込んだりした。タームごとのレポート締め切り前には徹夜、1～4 時間程度のみ寝る半徹夜が続いた。

自身が通信教育を受けた経験から、文字画面のみより、文字画面＋音声が、さらに教員が映ったビデオがある方が、親近感が沸く、孤独になりがちな通信教育だが、学校や先生と繋がっている感じがすると分かっていた。そこで、リスニングや会話も含む総合英語の授業ではなるべく授業資料に 2 度程度は自身が解説する、または会話の相手をするビデオを撮影して PPT に載せるよう心掛けた。

単調になりがちな、オンデマンド受講を少しでも興味を持って楽しく受けてもらえるよう、通常の対面授業のように、時には海外旅行の経験談やジョーク、クイズもいれた。英語資格試験対策的な授業でも、文字による解説だけでなく、解説の音声録音を所々に入れた。

授業の PPT サンプルを末尾資料に挙げる。

また、特に 1 年生の授業では、大学に入学したものの登校できず孤独や不安を感じているだろうので、初回授業のオリエンテーションでは、「オンライン授業となって不安だとは思うが、Moodle に挙げる PPT を利用して、毎回しっかりと学習を積み重ねれば、単位習得は難しくはない」こと、また、メールアドレスも公開し、質問や相談は気軽に Moodle のチャット機能やメールで知らせるように、と話し、安心して授業を受けてもらえるよう心掛けた。

２－６．課題採点とコメント

前期は４科目中３科目で平常の課題としての英作文および 2 科目手は学期末プレゼン課題の代わりとしての英作文課題があり、3 科目合計で 8 回あった。事前に採点基準を示しておき、それに従って採点し、コメントを書き込んで返送した。

3 科目 8 回の内訳は金 2 英語 I（35 名）×4 回、金 3 英語 B3（27 名）×3 回、金 4 英語 I（28 名）×1 回、で、合計約 250 の英作文を採点、コメント記入した。これはかなりの労力・時間を要する仕事であった。

３．オンライン授業のメリット・デメリットや効果

３-１．Moodle による小テスト（自動採点）のメリット・デメリット

従来の紙での小テストと、Moodle システムでの小テストのメリット・デメリット、を学生にとって／教師にとって、に分けて記載する。

表２．小テストのメリット・デメリット

		メリット	デメリット
紙	学生	・ネットに繋がるデバイスが無くても、受験可能。 ・返却された小テストを保管しておけば、ネットにつながなくても復習できる。	・回収して、授業後に採点、返却が翌週以降となるため、学生が文法や語彙を誤って学習してしまった場合、その発見・修正が遅れる。
	教員	・作成が Moodle の小テストよりは短時間でできるか。	・作成に時間がかかる（原稿作成、印刷、用紙裁断） ・採点・記録・必要ならコメント記入、に時間を要する。（40 人クラス、3 問で 20 分程度ではあるが。） ・欠席した学生が居る場合に備え、毎回過去の問題も持ち歩くので、授業セットが重い。 ・学期末試験が近くなると、欠席時の追試験を受けていない学生にたびたび呼びかけ、それでも受けに来ないなど、で、

			管理の手間・労力がかかる。試験後に小テストの追試を受けていないことが発覚し、慌てて掲示板に呼び出しを掲示、という労力がかかる、成績評価の一部なので、神経がすり減る。
Moodle オンデマンド	学生	・採点が即時。 間違いにすぐ気づき、覚えなおしができる。 ・すぐに点数が分かり、複数回の授業でどこが自分の弱点か、客観視しやすい。それにより、学期末試験の対策がしやすい。 ・追試を空き時間や自宅で受けることができ、授業後に残って受けたり、教員研究室に出向いて受けたりする必要がない。	（対面授業で、小テストは Moodle で授業内に受ける場合、ノート PC かスマートフォンなど、デバイスを持参する必要がある。）
	教員	・採点に時間がかからない。 ・記録に時間がかからない。 ・教室に毎回増えていく紙を運び続ける必要がない。 ・追試を学生に随時受けさせることができる。 ・締め切りを設けることもできる。	・作成に紙小テストと同等かそれ以上の時間がかかる。

表中に記載したように、オンライン小テストは、採点が自動でされるというメリットが大きいが、作成に時間がかかる。簡単な空所補充の問題でも、3 問で 1 時間程度。初期は Moodle 小テスト機能の使い方学習をしながらで、数時間かかった。

教材の、問うポイントを選び、問題を頭の中でざっと作った後も、Moodle 上で小テストの公開・終了日時、結果開示方法（時期タイミング）、点数、など細かな設定、小テスト説明欄に受験注意等の入力（毎回同じ部分はコピペで済むが、締め切り日などは、下の自動表示では小さいので、説明欄にも大きなフォントで記入。受験忘れを防ぐため。）実際の問題文、選択肢の入力、必要なら正解・不正解の場合のコメント入力、全体の確認、修正等、たった 3 問の小テストでも、さまざまな設定作業もあり、1 時間程度はかかってしまっていた。

３-２．学生の学習状況

３-２-１．授業へのアクセス

脱落（アクセスが数回のみ、または最初は続けてアクセス、途中から無し）、または放棄者

（アクセス無し）が各クラス 1～5 名出た。学習履歴を確認し、アクセスが無い・少ない学生には Moodle のメッセージで呼びかけを行ったが、すでに諦めたのか、そのような学生は結局復帰しなかった。

３-２-２．授業外学習時間

後期の、大学が実施した授業評価アンケート結果から授業外学習時間を見てみると、授業外学習時間は 1 時間～2 時間未満が多く、中には 2 時間以上学習した学生もあったようだ。ただし、アンケート回答数が少なく、全体の様子は分からない。

表３．授業 1 回あたりの授業外学習（予習・復習・宿題等の時間を含む）

	木２TOEIC 対策授業	金 1 総合 Stretch！	金2 総合 AmEngF
回答数/受講者	2 / 35	6 / 27	6 / 35
3 時間以上	0	1	1
2～3 時間未満	1	1	1
1～2 時間未満	1	4	4
30 分～1 時間未満	0	0	0
30 分未満	0	0	0

３-２-３．授業への集中度

同じアンケートで、授業への集中度はおおむね、よく集中していたようである。オンデマンド教材なので、PPT スライドを飛ばしながら見たり、解説音声や動画を飛ばしながら見たりすることもできるが、それは各自の力に合わせて行ってもらえばよいと考えていたので、構わない。（実際、筆者も通信教育受講中は、スライドにつけてくれてあった「速度調整」で 1.5 倍にして聞いていた。）目標は「スライドをしっかり見ること」ではなくて、その回の習得すべき事柄を身につけることであるので。

表４．授業によく集中していましたか。

	木 2 TOEIC 対策授業	金 1 総合 Stretch！	金2 総合 AmEngF
回答数/受講者	2 / 35	6 / 27	6 / 35
よくした	1	4	4
どちらかというとした	1	2	2
どちらでもない	0	0	0
どちらかというとしなかった	0	0	0

３-３．教育効果

英作文、プレゼンは力作、優秀作が多かった。多少ケアレスミスは見られたが、基本的な語彙・文法事項はすでに身についていた。語彙選択のミスや、態、時制、相のミスなどが時々見られた。

あいにく著者は 2020 年度 4 月着任で、和歌山大学の学生の英語力データを持っておらず、この課題の出来具合が元々の英語力によるものなのか、授業を通じて獲得した力によるもの

か、は判断ができない。「総合」の授業では、新しい語彙や文法項目を習得するより、すでに獲得している知識を使って、英語を「発信」することに重点があったので、各自その訓練が出来て、「前より話せるようになった・書けるようになった」と実感できれば効果があったと言える。

後期は他の受講生のプレゼンを視聴し、ピアレビューをするという課題があり、他の受講生の発音の良さや、作られた文の正確さなどに刺激を受けたというコメントが多く見られた。

３－４．Zoom 授業のメリット・デメリット

１）ビデオカメラのオン・オフ

メリットとして、まず、筆者自身が今年度初めて自分が教える学生の顔を見たので、素直に嬉しかった。昨年 2 月末から（まだ名古屋に住んでいたのもあって）自粛生活、4 月和歌山大学に移ったものの、同僚にも学生にもほとんど会わないまま、黙々と主に授業準備の仕事を続けており、さすがに欝々としてきていた。

受講生がビデオカメラオン（「顔出し」）の方が教員にとってはアイコンと名前のみの画面に向かって話すより話しやすく、また学生が理解しているかどうか、反応が見られるので有難いが、学生の心理を考えると「顔出し」を強要することはできない。初回と最終回の試験開始時以外は、「任意」としたところ、全員がカメラオフとなった。数名がオフにすると、たとえ自分はオンでも良いかな、と思っていても、そのままオンで留まることも心理的に難しいのか、画面上で皆次々とオフにして行った。

メリットと背中合わせであるが、全員がカメラオフである画面を見ながら、こちらは笑顔で人アイコン、名前のみの画面に向かって話すのは、最初はやや違和感があった。これは教師側による「慣れ」「想像力」で克服できる程度のデメリットと考える。

２）グループディスカッション

三重大学「英語音声学」の授業では、一度であるが、Zoom のグループ分けの機能を用いて、受講生を 5 名程度のグループに分け、「イントネーション」などについて話し合ってもらった。教員が、まるで教室で机間巡視するように、グループディスカッションを聞きに入ることが出来る。4 つのグループを観察して回ったが、司会役を決めたりして、予想より活発に会話していた。ただ、1 年生でまだ大学でお互いに会っていないため、ビデオ「顔出し」無しの、音声のみでの会話は少し行いにくかったのでは、と想像する。何度か会って、親しい仲なら、音声だけでも議論することはできそうであった。

筆者がグループ観察を終えるつもりで「終了」を押し、Zoom 会議自体を終了してしまった。学生が気付いて入り直してくれるまで、授業がしばし途絶えてしまった。事前に練習・確認を十分にする時間が無かったため、操作を誤った。

４．学生からの評価

前期は自作の授業評価アンケートを Moodle に設置したつもりだったが、操作を誤っていたようで、木２・金３・金４クラスでは、アンケート現物が設置出来ておらず、回収できず。金１英語 I（総合）クラスのみ、回収できた。後期は多忙のため、そのアンケートの設置が間に合わず。後に、教育サポートシステム上で、大学が行う授業評価アンケートがなされていた

と知った。少しの数の回答があった（前期科目アンケートについては、現在残念ながらシステムからなぜか閲覧できない)。

全般的に、テキストや説明難易度、授業での量、進度、説明の量などに不満はなく、おおむね好評であった。

（1）前期

【金 1 英語 I（総合）（AmEngF)】35 名中 15 名回答：

まず、授業後少し遅れて設置したにもかかわらず、約半数と回答数が多く、また、一言でなく、長文の回答が多かった。オンライン学習に不安を抱えながら受講した学生が、教員動画もある資料で学習し、安心した、という気持ちや、楽しかったという気持ちを伝えたくて、書いてくれたものと思われる。筆者も大変な時間をかけて授業を作成していたので、学生の感想を読んで、報われた気がした。主な感想を次に挙げる。

≪良かった点≫「トーク/余談/クイズなどが面白く、楽しみにしていた/楽しかった」（同４）「音声だけでなく顔出し（動画）もあったので安心して受けることが出来た」（同３）「オンラインになり不安だったが、授業の受け方やテストについても詳しく説明されていて、安心して受けることができた」（同２）「先生が楽しそうでよかった」（２）「詳しい解説があってよかった」

「英語は苦手で、英語の授業はあまり好きでないが、オンライン形式で自分のペースで学習を進められるという点がとてもよく、良い学習ができました」「受けた中で一番楽しい授業だった」

≪良かった点：技術的なこと≫「音声解説が一続きの自動でなく、短めでそれぞれ手動だったので、用事で離れたりしたときに、聴き直しがしやすく良かった。(他授業で、一連の説明が自動で流れるものがあり、操作できなかったとのこと。)」

≪改善希望等≫「少しでも良いのでオンラインで授業をしてみたかったです」「teams などを使ってリアルタイムの講義もしてほしかった」「オンラインテキストでの課題提出の中に改行などで Enter キーを押してしまうと即提出になりその後何もできなくなるので word や pdf での形式がよいと感じた」

≪その他≫「小テストの期限を忘れて何回か受け忘れてしまった」（２）

（2）後期　大学教育サポートシステム上でのアンケート

授業の難易度や説明の理解しやすさ、教材の利用の仕方、授業内容の量、スピード、満足度、新しい知識・考え方・スキル等が習得できたか、については、どの科目も「確かにそう思う」「どちらかというとそう思う」であったので、詳細を挙げることは割愛する。以下は記述式回答の、「良かった点」「改善すべき点」である。

【木２TOEIC 対策授業】自由記述無し。

【金１　総合　Stretch!】

≪良かった点≫

・最後のプレゼンが良かった。対面でみんなに会えていない分、プレゼンを通して他の受講生と繋がれた気がした。

・パワーポイントからいつも先生の一生懸命さが伝わってきた

・音声があり、わかりやすかったです
・生徒に負担がないように難易度や一回の授業量が配慮されていて受けやすかった。また、毎時間に本時の振り返りで小テストがあったり最終回ではプレゼンをつくってみんなで共有したりと身になる授業であったと思う。
・パワーポイントを見て授業を受けるというものでしたが、対面でなくても受けやすい授業にする工夫がされていて、分かりやすかったです。
≪改善すべき点≫
・PowerPoint の音声のマークが重なっているところがあってずらさないと押せなくてすこし面倒でした。
【金２ 総合　AmEngF】
≪良かった点≫
・難しい文法を学ぶというよりは、簡単な英語を話せるようになるということに重点を置いていたのが、英語をなかなか話せない自分にとって良かった。
・何故この単語を使って、あの単語がだめなのかの説明が分かりやすかった。
・英作文や英語でのプレゼンは実践的なものであり、英語の技能の向上に役立ったと思います。それらと通常の授業とのバランスも良く、楽しく授業に臨むことができました。
≪改善すべき点≫
・教科書の内容に会話をすることがあり、その練習はしにくかったと思います。コロナで仕方がないと思いますし、私も正直良い改善策は思いつかないです。すみません。

５．問題点や苦労した点

授業準備、課題採点・コメントの労力が多大であった。

５－１．シラバス修正と授業準備概観

シラバス修正および授業準備（教材研究、PPT コンテンツ作成（録音・録画含む）、小テスト作成等）に多大な時間と労力が要した。

筆者が 2020 年度より本学に勤務のため、すべての担当科目が初で、テキストもすべて初めて使用するものであった。そのため、各回の授業計画（どの部分の解説を丁寧にするか、何について解説するか、どの程度の習熟度を期待して解説をするのか）から、実際の教材研究、それを踏まえた PPT コンテンツ・小テスト作成となり、通常の、教材研究や PPT ファイルのストックがある場合に比べ、相当多い準備時間を要した。

また、これは筆者今年度独自の事情であるが、遅い時期の公募で、採用内定が 2 月末だったので、研究室・自宅の引っ越しを 3 月内に設定できず、4 月にずれ込んでいた。加えて、和歌山大学では校舎改修を行っていて、4 月には仮部屋に入り、4 月末に改修後の校舎への引っ越しもあった。4 月は自身の研究室・自宅の引っ越し、和歌山大学での仕事内容の学習、パソコンやメールの設定、メールソフトの使い方・物品購入申し込みなど事務システムの学習に追われていた。（これらの多くは独習であった。英語教員は筆者が初という部署に配属で、直近の英語同僚が居ないという状況であること、緊急事態宣言を受けて、他府県在住のため在宅勤務となった教員が多く、近くに仕事内容や事務システムについて尋ねる同僚が居ない中、

ほとんどを独習した。事務室に聞くにも、部署が多くどこに問い合わせてよいか分からず、違う部署に尋ねて戸惑われたこともあった。また、部署初の英語教員、教育学部棟に居る数少ない部署の新任であることから、初期には事務連絡が漏れたこともたびたびあり、こうした精神的疲労もかなり大きかった。）

そこに、緊急事態宣言を受けての「原則としてすべての授業を遠隔授業とする」こととなり、シラバスの修正に追われた。シラバス修正は単に授業回数を 15 回から 13 回に変更するだけではない。オンライン化により、授業設計自体を修正する必要があり、当初予定の試験をどうするか、試験比率を減らすならその分をどのような課題にするか、評価のための点数配分はどの程度にするのか、など、見直し修正が必要で、4 月中旬までシラバス修正に追われた。中～下旬は自身の引っ越し・片付、和歌山大学での研究室の引っ越し・片付・整備、に手間取り、その合間に Moodle の初歩的な使用法を独習し、やっと自分の科目を Moodle 上に設置したところまでであった。教材研究に取り掛かれたのは 4 月末であった。

また、映像を利用する科目が 3 つあり、1 つは DVD 教材付きのテキスト、２つは教師用のみで学生には DVD が付いていないテキストであった。しかし、DVD 教材付きのテキストのクラスの中に、「DVD 再生手段が無い」（大学生協で推奨して多くの新入生が購入したと思われるノート PC は最近のものであり、DVD ベイ無しタイプであった。また、最近は映画等のネット配信が発達しており、実家に DVD プレイヤーが無いこともある。これは盲点であった。）そのため、DVD 映像を取り込んで Moodle の Mediasite に載せ、そのリンクを Moodle の対応する回（週）に設置する [1)]、という作業も増えた。また、Windows10 には動画再生ソフトが入っていないため、フリーソフトや市販ソフトの検討をする時間も要した。

筆者の授業は木・金に集中しており、和歌山大学では前期開講が 5 月 7 日（木）となったので、ゴールデンウイークは全日授業準備の仕事に追われた。Moodle の使い方を学習しつつ、まずシラバスを Moodle 科目それぞれに載せる、シラバスや授業の行い方・受講の仕方についての解説を作成し、それを載せることから始まった。そのような状況であったため、ゴールデンウイークは 2 土・3 日は自宅で、4 月～6 水は仮研究室で 2，3 時間の仮眠だけでほぼ徹夜を続け、7 木早朝に木 2 TOEIC 対策授業のコンテンツを掲載、午前・午後に金２総合英語のコンテンツ作成、金 3・4 の準備にかかったのは、夜 2 時間の仮眠の後、8 金 0 時であった。何とか金４のコンテンツは当日 10 時過ぎに掲載することが出来、間に合った。この週は仮研究室でほとんど籠ってほぼ徹夜に近い状態を繰り返し、自宅に戻ったのは 9 土午前だった。4 月就職以来初めてのゆっくり過ごす日であった。

このように特殊事情があったため、4 月・5 月は特に超過労働が続いた。コンテンツ作成（PPT に解説音声や解説ビデオを埋め込むという方法を採った）も順調とは行かず、初期には試行錯誤があった。例えば、マイクを PC に繋いで音声録音したが、マイクが悪かったか、うまく行かず、WEB カメラに変えてやり直し、2 時間強を浪費／説明録画を PPT に付けたが、Moodle にアップしようとしたら容量オーバーで出来ず、結局諦めて動画を外してアップ。2 時間強を浪費。（後になり、動画は小分けすればよいと分かったが、初期にはそれが分からず、せっかく撮った説明動画や、4 月に特に不安を抱えているだろう 1 年生向けに撮った挨拶動画は全て無駄になった。）／説明録音・録画を聴き直し、「え～」の多用など話し方の癖、言い

間違いの重大なものがあると録り直しし、通常対面授業で話すより 2～3 倍の時間を要した。など。

6 月以降も、Moodle の使い方には慣れて、授業コンテンツ・小テスト作成のための使用法学習時間は減ったが、中盤からは英作文等課題の設計、説明と周知、Moodle 課題提出機能の使用法学習、課題の採点・コメント書きという仕事が加わり、これに多大な労力と時間を要した。

5－１－１．授業準備

以下に、2020 年度前期主に準備に時間を要した２つの科目の、授業コンテンツ（PPT）作成＋小テスト作成時間（Moodle 機能の学習時間も含む）の推移を挙げる。これら 2 科目はテキストの 1 回の分量・内容が多めであり、また、語彙・文法・リスニングなど解説要するところが多いことや、総合科目では会話練習もあり、会話相手としてビデオを作成するのに時間を要することがあった。

１）木２　英語 III　TOEIC 対策授業

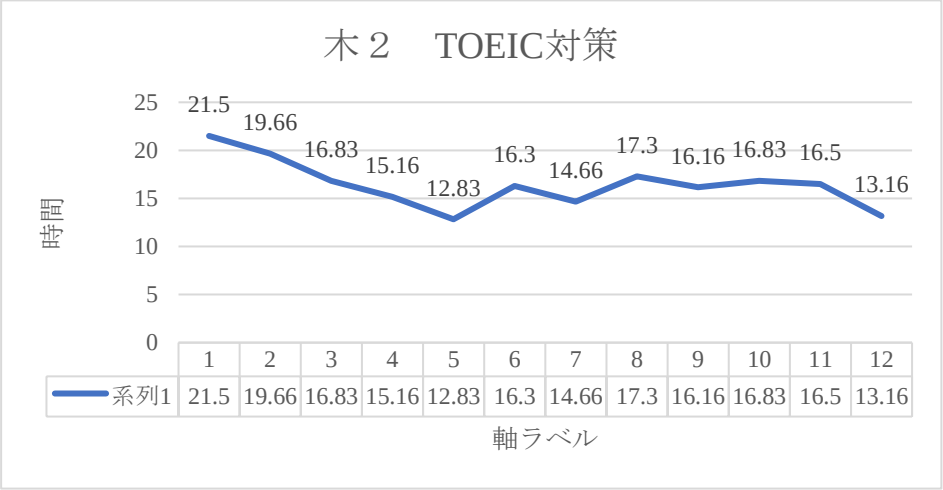


図１．木２　TOEIC 対策授業準備にかかった時間

木 2 TOEIC 対策授業で使用テキストは「Score Booster for the TOEIC　L&R test Pre-Intermediate」（金星堂）で、TOEIC テストと同じ問題パートを網羅し、聴き取りは穴埋め式など、TOEIC の問題を解く前段階の問い方をした基礎編 5 ページと、問題数は少ないが TOEIC と同じ形式の応用・実践編 Mini Test 3～4 ページから成る。

ドリル式教材では単調な学習になりがちなので、なるべく解説を入れる、音声による解説も入れるよう心掛けた。冒頭の単語・熟語コーナーでは毎回 4～8 個をピックアップし、語法や語源、時には英英辞典の使い方などの解説を入れた。この科目がもっと準備に時間がかかった。月曜から水曜、初期は木曜朝までかかって PPT を作成、初期には金曜の授業 3 コマの準備は木曜になってやっと、という状態だった。

授業準備時間の平均は 16 時間 40 分であった。

この科目は筆者が作成した授業評価アンケートが Moodle 上で操作を誤ったか、アップし忘れか、コンテンツが載っておらず、あいにくアンケート回収が出来なかったが、個別に質問をしてきた学生が 3 名ほどあり、「自習だが、丁寧な解説があり、分かりやすい／学習しやす

い」という感想を頂いていた。

２）金２　総合英語

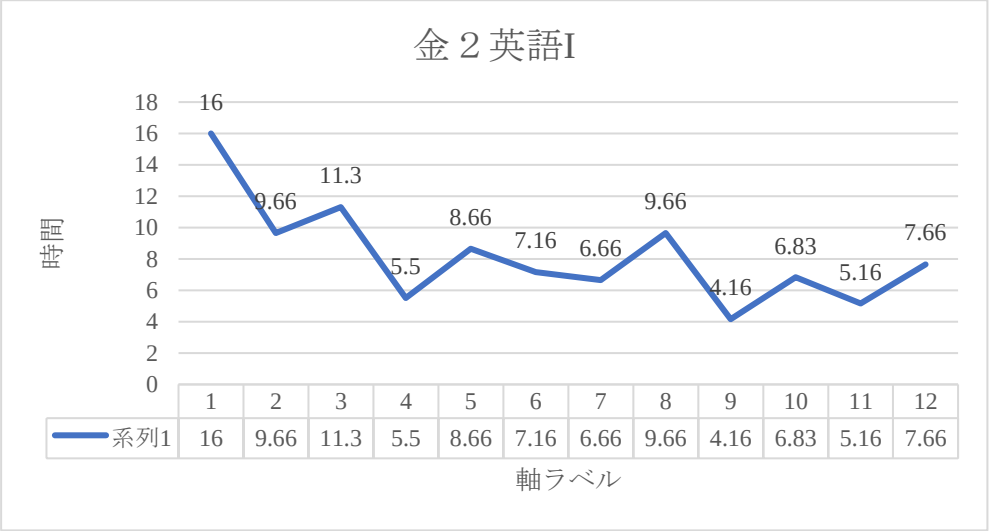


図 2.　金２　総合英語授業準備にかかった時間

この科目のテキストは「American English File2（2nd Edition）」（Oxford University Press）で、語彙、文法、発音、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキング、と英語の多岐にわたる能力を鍛える練習をする教材である。学生がなるべく英語に触れる時間が増えるよう、簡単な項目は英語での解説や、旅行の話、文化の違いなどの余談も時々入れるようにした。また、会話練習コーナーでは、筆者が会話相手となり、可能な場合は役割を交代した場合も入れて録画した。そうした解説録音、録画に時間がかかるので、準備時間は長くなった。また、文化紹介の側面もあり、都市の風物や食事、歌手や俳優、など写真も多用して紹介されているテキストである。筆者が馴染みがないものもあり、そのような事物・人物についての調べものをする時間も多くあった。前出 4 章で見たように、アンケートでは「旅行や文化の違いなどの余談が楽しかった・興味を持った」等の感想があった。授業準備時間の平均は 8 時間 20 分であった。

３）他英語総合 2 科目

他英語後総合 2 科目のテキストは「Stretch2　Student Book」（Oxford University Press）および、「BBC World Profile on DVD　（BBC やさしい英語と映像で学ぶ総合英語）」（南雲堂）で、映像を見て学ぶ時間がある分、解説はこれら 2 科目ほど必要なく、準備に要した時間は平均およそ 4 時間 40 分と、さほど多くはなかった。これらの教材も解説を多く要するものであったとしたら、授業コンテンツ作成が間に合わない、または過労で倒れる、などが起きていたかもしれない。

5－１－２．課題設計・周知・採点・コメント

前出２－４．成績評価方法で示した通り、英語総合 3 科目については試験でなく、英作文課題とした。まずは課題の設計（成績評価法における配分、課題の回数、課題の内容）に多くの労力・時間を費やした。また、3 科目で回数、点数が異なるため、それぞれに「課題概要」を作成して周知する必要があった。また、オンラインでの提出方法についても、練習提出を

設置し、詳しく説明を付けた。筆者の仕事記録メモによると、課題を設計（テーマを選び、配点や採点基準を決める）・周知するのに、最初は Moodle の課題システムの学習も含め 5 時間 30 分、システムを把握した後でも、1 時間 15 分～2 時間かかっていた。

前出２－６．に記載した通り、英作文課題が 3 クラスで合計約 250 件となり、課題の採点・コメントに多大な労力・時間を要した。採点する際、タイマーを 8 分で設定したが、英語についての添削・修正案（語彙選択、文法、接続詞、時制など）、励ましコメントを記載すると 8 分では終わらず、10～30 分を要した。1 つの課題について、クラス人数は 28～41 名で、通常の授業準備業務を進めながらであるので、少しずつの作業となり、10 日～20 日程度かかった。クラス・課題回によっては採点・コメントの返信が 2 か月以上後になったケースもあり、学生には申し訳なかったが、授業・委員会その他業務の都合で致し方なかった。

提出課題は総合で約 250 件あったので、要した合計時間は 1 人当たり 20 分として約 83 時間、30 分として約 125 時間となる。

要した時間もだが、採点作業になかなか取り掛かれないで学生を待たせていること、取り掛かっても時間がかかり進度が遅いこと、返信が遅れ、「採点・コメントをしなくては」というプレッシャーが長期にわたって続いたことによる精神的疲労も大きかったように思う。

授業準備と合わせ、平日だけでなく、週末や年末年始も仕事をしていた日が多く、自粛生活のストレスと合わせて、長期にわたり、ストレスを受けていた。

５－２．「単位認定試験」の問題

大学が「原則としてすべて遠隔授業」と決定し、成績評価の重点が学期末の単位認定試験にあった科目は再考することとなった。「授業はオンライン、試験のみ対面」ということも考えられたが、大学事務に問い合わせると、「登校させての試験は三密になる危険があり、難しいだろう（極力避けてほしい）」との回答であった。

筆者担当の TOEIC 対策科目は学習内容からしてレポートはそぐわないので、点数比率を下げたうえで、オンラインで試験にすることとした。

オンライン試験では、カンニングは防げないので、（小テストもだが）「授業資料、教科書、ノート、辞書等調べてもよい、家族・友人・ネット上の誰かに相談しつつの受験や代理受験は禁止」という方針で行った。

５－３．課題が多すぎる「課題地獄」の問題

筆者担当の授業課題は、授業内でも一部準備作成時間を設け、学生がいろいろな授業の課題でさばける容量を超過することのないように気をつけた。もちろん、「それでは授業外学習を単位分行わせることになっていない」という批判を受け得るが、コロナ禍という特殊な状況下で、キャンパスに通えない、友人と会えない、クラブ活動ができない、孤独感がある、等様々なストレスにある学生たちの、心身の健康も重要であると考え、授業外学習が膨大にならない範囲で授業課題を設定したつもりである。

「課題地獄」の問題は、他大学でも多く発生した状況のようなので、再度 7 節で取り上げる。

６．問題点や今後の課題

前出５-１．節で、授業準備に多大な労力と時間を要したことを報告した。これは全国的に

大学で起きたことのようである。全国大学高専教職員組合（全大教）による「新型コロナ : 労働実態・教育研究状況アンケート結果」（2020 年 10 月）（回答：教員約 1174 人、事務職員・技術職員 643 人）によると、「新型コロナ対応下での業務負担については、教員の約 80%が「増えた」と回答しており、その理由として遠隔授業への対応が多く挙げられています」とのことである。（内訳は「かなり増えた」47.5%、「やや増えた」32.9%、「変わらない」13.6%、「やや減った」4.4%、「かなり減った」1%未満）（全大協「全大協新聞」2020. 第 376 号）
また、「新型コロナの感染拡大を防止しつつ教育研究体制の充実を進めるための課題」（3 つまで回答可）については、以下のような結果を報告している。

（1）新型コロナの感染拡大を防止しつつ教育研究体制の充実を進めるための課題
（上位から降順に並べ替えは筆者による）

1 位　対面での教育研究のための学内のスペース確保や感染拡大防止設備の整備　49.9%
2 位　学内における遠隔業務体制のための機器や通信環境の整備　42.3%
3 位　家庭内における遠隔業務体制のための機器や通信環境の整備　40.7%
4 位　適切な手当の支給　38.2%
5 位　法人全体の経常的な経費の増　30.2%
6 位　ソーシャルディスタンスに配慮した少人数での授業の実施　29.6%
7 位　ソーシャルディスタンスに配慮した教育研究のための教職員の増　24.4%
8 位　在宅勤務における教職員の健康確保方法の整備　13%
その他　9.4%
（全大協「全大協新聞」2020. 第 376 号）

このように、課題は設備・環境整備、手当てや経費、対面授業への対応、健康確保方法の整備、などであった。

このうち、順位としては 8 位であるが、在宅勤務教職員に限らず、学生・教職員への心身健康のケア・サポートも重要である。

筆者も自粛生活と、多大な業務（2020 年度より新職場という事情もあったが）のため、今年度は長期にわたりストレスを受けていた。また、事務仕事・授業準備で徹夜やほぼ徹夜を繰り返しながら、1 日の大半をパソコンで仕事をしており、5 月には肩・首のコリから頭痛が発生し、1 週間以上続き、病院に行った。

大学側も緊急事態宣言を受けての、教育体制の急変で多忙を極めており、学生・教職員への健康サポートを十分にするのは難しかった。保健センターからは、5 月 15 日、学生に対して「VDT 症候群」への注意喚起を送付してくださっていた。

７．学校教育全般の、オンライン授業の利点や問題点

７－１．オンライン授業の利点

コロナ禍でやむなく一気に始まったオンライン授業であったが、メリットもあった。平井 (2020) は学校休業中のオンラインの学びで「教育現場に学び方と学ぶ場所という二つの多様な学びの姿を示した」と指摘している。ポイントのみ引用させていただくと、「学び方」の多様性として、「学ぶ内容に応じて適切な学び方を選ぶ：技能中心→ドリルが有効、知識・理解

中心→オンデマンド教材が有効、AI を活用したドリルであれば、個別に適切な課題が提供されるという個別最適化が図れる」ことと、「同期型オンライン授業では探求型の学びの実践が見られた。（中略）オンラインの学びに取り組むことにより、授業自体が学習者主体の授業に変容していったと言える」と述べている（平井 (2020:112)）。

この「個別最適化」という点について、筆者も、同じクラスの学生に習熟度の開きがかなりあり、授業の目標を定めることや、実際のタスクに苦労したことがある。そこで、教室を 4〜6 ブロックに分け、異なる活動をさせて、10〜15 分毎に教室内を移動して違うアイランドに行って活動ないし学習をする、という「サーキット授業」を考えつき、行っていた時期がある。運動のサーキットトレーニングにヒントを得た。数分で異なる課題に取り組むと飽きない、次は何だろう？というワクワク感もある。

実はこの手法はすでに IT や反転授業を混ぜて行うとして存在していたようである。（マイケル・B・ホーン、ヘザー・ステイカー (2017) ）。今回のコロナ禍で機器整備やオンライン授業が一気に進んだことを受けて、今後の教育において、この IT を利用した「ローテーション・モデル」で、学びの個別最適化を進めることが可能になった。落ちこぼれや、逆に、能力の高い学生が、自分の能力よりも低い目標のクラスに入っているため、さらに能力を伸ばす機会を阻害されているという問題の解決の糸口になるだろう。

また、「学ぶ場所」について、平井 (2020) は「多くの自治体において、教室での対面授業に参加できない児童・生徒がオンラインでは参加できたという成果が見られた」（対人関係が苦手な児童・生徒が参加しやすかった）平井 (2020:111)と指摘し、このように効果があったことを受け、学ぶ場所の多様性により、今後の取り組みとして熊本市の例「短期の欠席には教室の授業をライブ配信、長期の欠席・不登校にはオンライン専用の教育課程で対応」を挙げている。平井 (2020:113)。

大学においても、長期の欠席・不登校、そこからの退学、という問題は存在している。今後オンライン授業の経験を活かし、熊本市の例のような教育の在り方の検討も望まれる。

7－２．学生にとって「課題地獄」となった（かもしれない）という問題

「課題地獄」という問題について、佐藤（2020）は以下のように論じている。

（２）「コロナ以前から、日本の大学生の授業時間外学習が不足しており、単位制度が実質化されていないことが問題視されてきた」（佐藤（2020:77））

「今学期学生たちが不満をもらしながらも時間を費やして課題に取り組んだ姿を見る限り、これまで学習時間が少なかった理由は、自学自習を行わない学生にあるというよりは、単位制度によって定められた量の課題を出してこなかった大学教員にあるように思われる。コロナ以前の授業では毎回課題が出ない、あるいは規定量に比して課題が少ないことが常態化していたのである。その理由はシンプルである。大学教員が採点やフィードバックを増やしたくなかったからである」（佐藤（2020:77-78））

「現状の課題量こそが適正量である可能性が高い。卒業所要単位数の 124 単位を四年間で 31 単位ずつ履修することを想定すれば、学期辺りに履修が推奨される授業コマ数は週に 7-8 コマである。この場合、1 日あたりの想定学習時間（授業を含む）は 7-8 時間である。学生が 7-8 コマ以上の科目数を履修して規定量の課題を全教員が出した場合、『課題多過

ぎ』になることは避けられない」（佐藤（2020:78））

つまり、今回のコロナ禍で「課題地獄」問題が生じたのは学生の履修コマ数が多いことが原因であって、各教員が出した課題量は、本来の「単位制度」から考えると適正量であったと考えられる、という指摘である。

大学の授業コマ数について、両角（2020 : 52-53）は「[授業コマ数は]学生にとっての履修コマ数、専任教員一人が担当するコマ数、大学全体での開講コマ数という三つの意味があるが、そのいずれも日本の大学は多すぎることがしばしば指摘されてきた」と述べている。また、「学生が授業外に学修しないのは学生が不真面目というよりもむしろ、上述のように、そもそも教員が授業外に学生が学修することを想定せずに授業を行ってきたからであった。学生の履修コマ数のみならず、日本では教員の担当コマ数も諸外国と比べて多く、一つの授業の準備に多くの時間が割けないという構造的な理由もあった」「アメリカでは一学期に 4-5 科目を履修し、一科目あたり 4-6 単位であるのに対して、日本の場合は一学期に 10-12 科目を履修し、一科目当たり 1-2 単位であるが、学生が一学期に取得する科目が多すぎることが学生の深い学びを妨げているという議論もなされてきた（吉見 2018）」と指摘している（両角（2020 : 53）。

学生にとっても教員にとってもコマ数が多いこと、その弊害が、コロナ禍でオンライン授業となり、「課題地獄」問題が出たことで、明確になった。これを機に、今後はコマ数、カリキュラム、教育の在り方が問われることとなる。

カリキュラムについては、赤沢（2020）が重要な指摘をしている。

（３）カリキュラム・マネジメントというと、どうしても教育課程の編成・実施・計画・改善のサイクル（PDCA サイクル）と教科横断的な学び（コラボレーション）とに視点が偏りがちになるが、これらはあくまでカリキュラム・マネジメントの実現のための手立てに過ぎない。何よりも重要なのは、目の前の子供たちのどんな点をどこまで伸ばしたいのか、そのために何をどのようにどれくらいするのか、という教育活動の目的・目標と内容・方法と、意図的・組織的・継続的に結びあわせていくことである。赤沢（2020:60）

この指摘にある通り、ここ数年、大学 FD、大学改革の波があり、例えば「アクティブ・ラーニング」や「PBL」を取り入れることが、手段でなく目的化してきたきらいがある。コロナ禍という危機下で教育を行ったのを機に、教育の目的・在り方を見つめ直す必要があると考える。

８．今後（ウィズ・コロナ、ポスト・コロナ）の教育について

佐藤（2020）が指摘するように、コロナ禍を機に元々すべきであった大学 FD が一気に加速した、ととらえることもできる。

教員が苦労して使い方を学習したオンライン道具（Moodle などのプラットフォーム, Zoom, Teams などの会議システムなど）をコロナが落ち着いた時に、必ずしも過去のものとする必要はない。ブレンディッド・ラーニングの考えで、有用なものはポスト・またはウィズ・コロナ時代に併用することが可能である。

例えば、筆者は 2021 年度の英語授業において、大学としては対面授業を予定しており、そ

れに従った計画でシラバスを届け出ているが、毎回の復習小テストは Moodle の小テスト機能で行う予定である。前述３－１．で述べたとおり、Moodle で行う小テストの方が紙で行うものよりメリットが大きいためである。

また、授業コンテンツをデジタル化して Moodle などの学習プラットフォームに保存してあることで、再利用が可能となる利点を生かし、「反復学習」の仕組みを作りやすくなるのではないだろうか。北尾（2020:48 -57）では「分散的な反復学習が知識を精緻化する」ことを示し、「効果的な反復学習で学びを深める」システムを提供することを勧めている。

溝上 (2020 : 94) は、オンライン学習が学習者の主体性に相当依存している学習法であるために、それがデメリットにもなり得る（うまく取り組むことが出来ない学習者の場合、学びが止まってしまうこともある）点に注意すべき、と指摘しつつも、オンライン学習を併用したブレンド型授業の可能性を述べている。学力の高い生徒について、「主体的に学べるならば例えば高校 1 年生が 1 年間で高校 3 年分の学習を終えることも可能である。場合によっては単位制や飛び級制度を利用し、通常より早く大学へ進学する可能となる」。（溝上 (2020:93-95)）そして、「学力が高い生徒にとっても低い生徒にとっても、与えられる学習環境の枠組みを多少なりとも自分で選択できるものにしていけるかどうかの多様性の問いである。多様性の力学はすさまじい個人差を生み出す。それを教育格差と捉えるのか、個の多様性の促進と捉えるのか、新たな社会的認識の課題も生まれてくる」（溝上 (2020:96)）と指摘している。

このように、コロナ禍で教育を行った経験から、今後は個別の「授業」だけでなく、大学としての「カリキュラム」、また「教育の在り方」の見直し、改善が期待される。

また、忘れてはならないのは、学生・教職員の健康について、である。6 章で健康問題に少し触れたが、妹尾 (2020)は「[コロナ禍でよくわかったことのうち重要な 3 点の第二は]教育行政や学校が、子供たちと教職員の福祉、ウェルビーイングに相当無関心であったことです。あるいは、関心はあっても、行動が伴わなかったということかもしれません」と述べている。そして、ポスト・コロナの働き方として、重要な観点を 3 つ挙げている。

（２）１．子供たちのどのような資質・能力を育むのかという原点に立ち戻りつつ、日々の教育活動や施策を見直す。マイナスや副作用が大きそうなものは、いったん休止する（やめる）。また、かけている時間の割には効果が乏しいものも大きくカットすることを含めて見直す（たとえば、通知表の所見書き）。同時に、その資質・能力の育成に関係が深いものは死守するし、もっと集中してアタマと時間を使えるようにしていく。

２．いくら教育上はよさそうに見えても、子供たちと教職員の福祉、ウェルビーイングを損なうようなものは、やめる。1 点目とも重なるが、手段が目的化していないか、常に振り返る。

３．ゼロか、100 かだけで考えず、柔軟にほかの選択肢はないか模索する。

妹尾 (2020 : 184-185)

素晴らしいカリキュラムや授業が用意できても、学生・教職員の健康を害してしまってはいけない。

今回のコロナ禍によるオンライン授業、コンテンツをデジタル配信したこと、教職員の多大な苦労を今回限りとして無駄にするのではなく、今後の教育改革に活かし、効率化できる

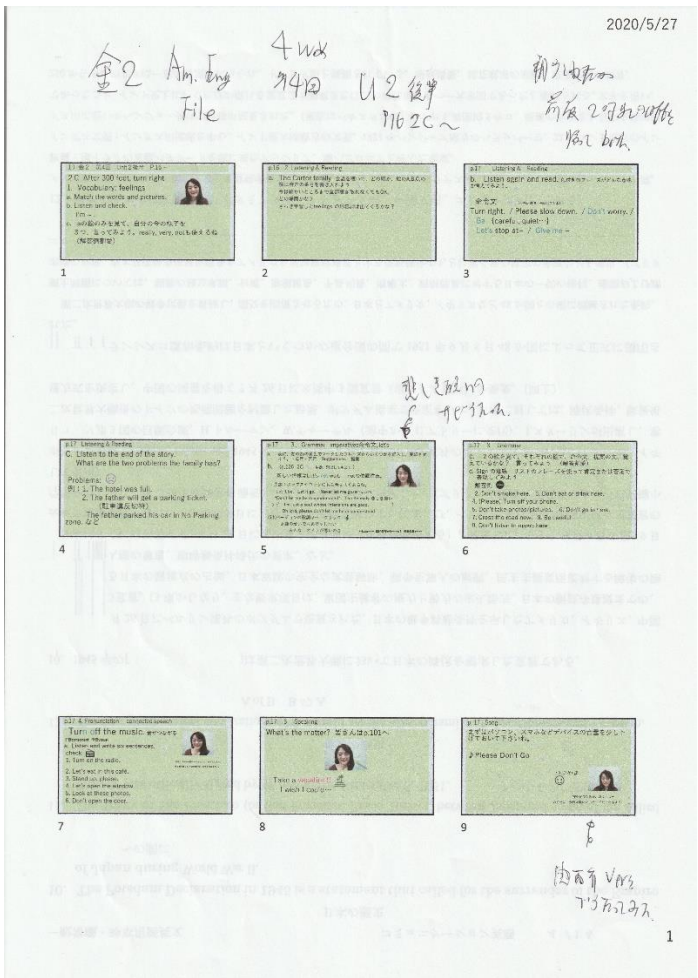
ところは効率化し、学生・教職員にとって健康で深い学びができる場を作ってゆくことが大切であると考える。

注

1. テキスト会社はコロナ禍という緊急事態であるため教材や解答集をオンライン配信する許可を出してくださっていた。素早く対応されたこと・許可されたことに感謝したい。Oxford UP は元々オンライン自習サービスがテキストについており（使用のための記号キーがテキストごとについている）、問題がなかった。

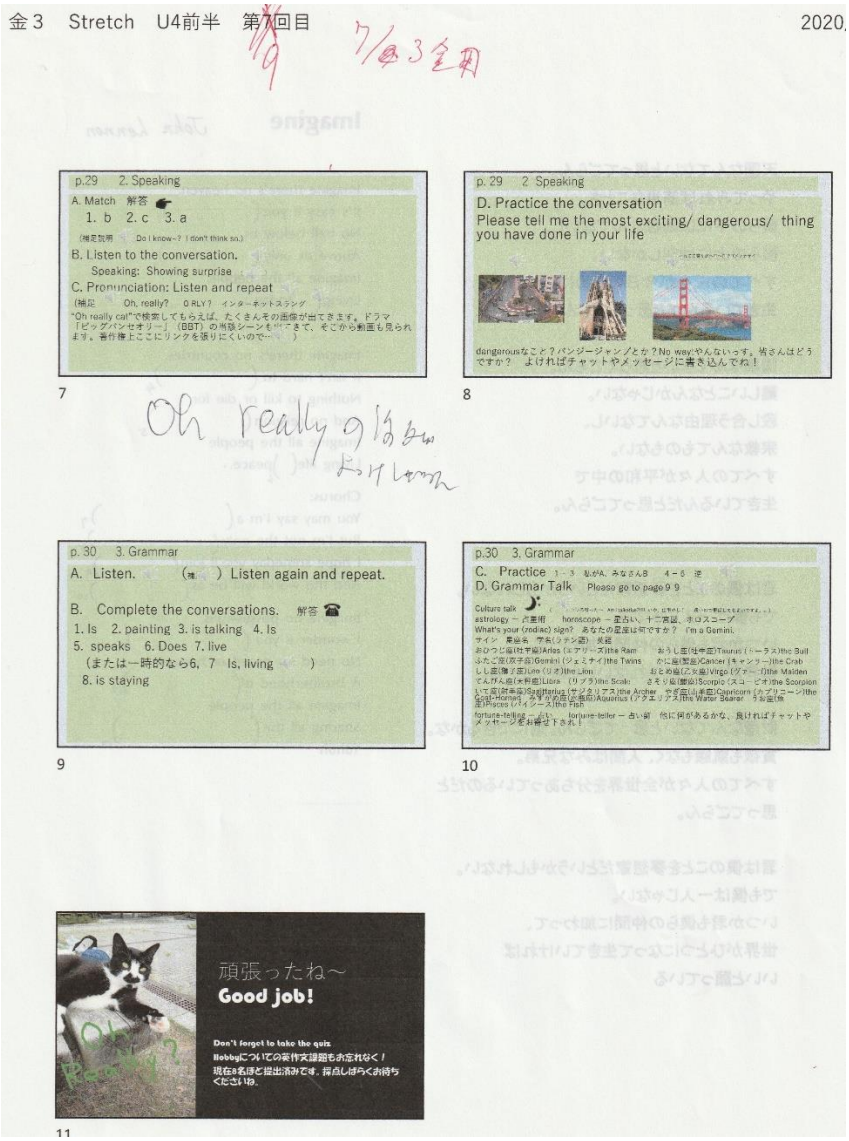
資料.　授業コンテンツのサンプル

１．金２　英語総合 AmEngF



会話練習パートはほぼ毎回、解説部分もなるべく教員ビデオを挿入した。この回では英語のリズムに関して、洋楽ヒット曲のサビの部分を歌ったビデオも入れ、学生からは「リズムについて分かりやすかった」、「気に入って何度も視聴した」という感想があった。

２．金３　英語総合　Stretch！



この回ではテキストの会話練習に出てきた、世界の都市に絡み、筆者が訪れたことのあるモナコの公道レースの道、バルセロナのサグラダファミリア、サンフランシスコのゴールデンゲートブリッジの写真を載せ、旅の話を英語音声で載せた。学生からは「旅の話などが聴けて面白かった」と好評であった。また、授業の終わりには学生の努力をねぎらう “Good job!” などの一言と、疲れを癒すような写真をつけた。これは大学キャンパス公認の猫の写真で、アメリカで流行った、不機嫌そうな猫の写真に“Oh really?” というセリフを添えるということを受けて、そのようにセリフをつけている。

参考文献

赤沢早人 (2020) カリキュラム・マネジメントで「教科書をこなす」発想を変える. 「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く―子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.55-61.

平井聡一郎 (2020) オンライン授業を止めてはいけない理由.「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く―子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.108-116.

堀和世 (2021)「オンライン授業で大学が変わる～コロナ禍で生まれた「教育」インフレーション」大空出版

石井英真 (2020)子供たちの「学びを保障する」とはどういうことか. 「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く―子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.62-70.

北尾倫彦（2020）「深い学び」の化学―精緻化、メタ認知、主体的な学び―.（クレイス叢書 01）図書文化社.

マイケル・B・ホーン、ヘザー・ステイカー (2017)ブレンディッド・ラーニングの衝撃―個別カリキュラム×生徒指導×達成度基準」を実現したアメリカの教育革命.小松健司訳.教育開発研究所.

溝上慎一 (2020)　主体性に依存するオンライン学習―教育格差か、それとも個の多様性か. 「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く―子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所. 88-97.

村上正幸 (2020) コロナ禍における大学でのオンライン授業の実情と課題『現代思想 10 月号』Vol.48-14.67-74.青土社

佐藤浩章 (2020) ポスト・コロナ時代の大学教員と FD：コロナが加速させたその変容. 『現代思想 10 月号』Vol.48-14. 75-8.青土社.

佐藤郁哉・吉見俊哉 (2020) 知が越境し、交流し続けるために：大学から始める学び方改革・遊び方改革・働き方改革.(討議)『現代思想 10 月号』Vol.48-14.8-20.青土社

妹尾昌俊 (2020) コロナ禍での反省を活かした学校の働き方.「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く―子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.178-185.

白川優治 (2020) 「学費」が可視化した大学の構造的課題.『現代思想 10 月号』Vol.48-14.35-45.青土社

両角亜希子 (2020) 大学経営の今とこれから.『現代思想 10 月号』Vol.48-14.46-56.青土社

引用資料：

全国大学高専教職員組合（全大教）（2020 年 10 月）「新型コロナ：労働実態・教育研究状況アンケート結果」（全大教新聞第 376 号 2020 年 10 月 10 日. PDF 版 http://zendaikyo.or.jp/?page_id=107., ）